

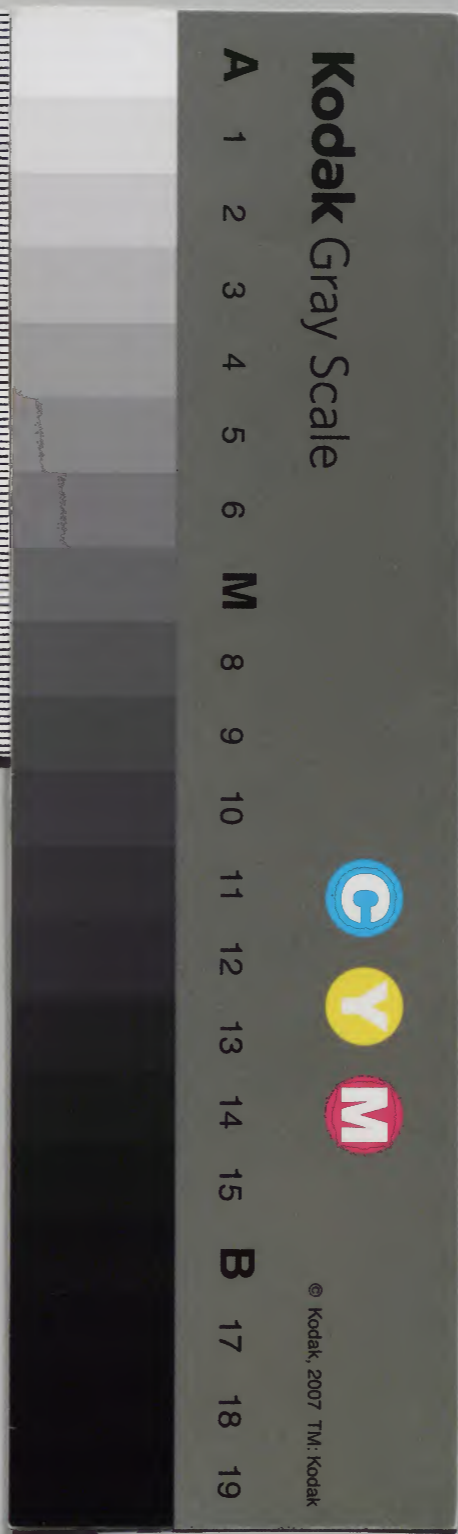
真際雜記

六十一

和書門		
二七八四二號	三八函	六九冊

内閣文庫		和書類
二七八四二號	三八函	六九冊

内閣文庫	
番號	和 27842
冊數	69 (60)
函號	213 3



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

從父之元年辛酉九月五日
至
國年十二月晦日既穡

辛酉雜記

六十一

真降雜記祀二十一卷

隠士真如實際中の業智真信輯集

伴蒿蹊翁の著りし近世時人傳りしもの六年戊申

書脱稿せり。刻成し寛政二年春戊戌月

此雜記の前巻は續近世時人傳の人名を以

録せしと後より二巻前編の書目録を以て抄お

しとて又記し

目録 第一巻

中江菴村 附番山氏

具承益軒



僧桃水

長山育子

若松綱子

伊豆女亭

駿府義奴

河内清七

近江新六

茅二卷

三宅尚高 附妻女

赤尾與右衛

寺井玄溪

小野寺秀和 附秀和妻

遊女大橋

石野權兵衛同市兵衛

菅原宗符

比呂若所

岡岡防守

傍列首坐

僧無能

甲斐栗子

樵七兵衛妻同之妻書

宮内園

木場利兵衛

古和伊麻子

龜田之兵衛

僧鐵眼

内及平左衛

古石氏僕

尼破鏡 附曲翠

遊女某尼

隠士石卧

江村專齋 附剛高

西生永流

青木長廣

僧圓空 附傍依宗

中倉忠宣 附山崎奇人

第三卷

隱士長江

荷田素滿 附松在階
以四卷志同

位田淺吾忠

山科曹史 附 中老

加島宗叔

長崎誠人

東金吾

僧佛巧坊

僧涌蓮

第四卷

柳沢湛園

求大雅僧

手島堵庵

北村祐庵

土肥二三

僧似雲

僧日初

僧日初

僧日初

僧日初

手車翁

金蘭高

父展相女

おと新成

畜乃良 附 僧亮
但房

僧日初

僧日初

僧日初

池大雅 附 妻玉蘭

沢村珍所 苗村女 附 妻女

高橋國南

久隅守景

廣澤長孝

僧惠潭

矢部三子

室所宗甫

近江権僧

第五

並河三民附 杉亭安

戸田旭山

僧文孝

井上通子

甲斐徳本

祇園梶子附 百合亭

惟然坊

表之

北山友松子

隠原茂隆

安友年山附 朴翁

有言源及

比色空山

僧圓通

村 山本通庵 杉本秋重

白鷗子 上

龜田窮乐

隠原隠僧

中江後附禪の原字の惟命通之與之馬と西言島那
小川邑の之と後樹下と孝人後後樹下と字を講はる
を以ての之此号を稱し又孝仲人有て光嘿軒の号
を授るも及て光の字を備録し者として嘿軒と稱し
年四十一歳すして慶安元年戊子八月廿五日病歿年
男宣伯通之を其弟の仲の後と函季孫三平後と云

江内内と稱し常省先生と謚し

能は符の平安の人本氏の聖尼通名決市の外祖の

妻をくして能は助を賜ふる宗禱の泊継叔父と

了女と稱し息遊と号すもほま著山と稱し歳

七十三元禄四年八月十七日卒

貝系益軒禱の著信字の子祓通名之兵衛筑前

福岡侯の世長元禄三年卒七十一老を告ぐ事を

叙し徳四年甲午八月廿七日歿年八十五

陸奥と能は尚の浄宗と徳早未滿の遷化し

伊後女身禱の長衡字の三彦中も通名といひ信

先生の第三子と稱する概の儒序ししと宗師を

終る迄戒二学院先生の例と葬

寛氏箱圃禱の奇字の子常通名常と進尾張國

海西郡多地村の人聰慧強記十餘語を授け年十八

よりて父母を従つて京師より東涯先生ののり支

致してて身蘭端先生を従ふ書又画を能は世奉安

の四井と号する浅井國南内園意海山科宗安と此

宮箱圃と終る年五十八東山平親事の墓地と葬

つゝ私に謚して以恭と云

近江膳所の上菅沼元記に芭蕉は字を以て世を
知らるる指曲翠と云る等の為は自ら

賣茶の行の肥前蓮池のくし野の紫山禪の元昭月海と
号早茶を推後秋津の化露を呼ぶは化露の黄蘗
指曲の号を以て既と茶を賣て既を助く年七十餘
師傳一言氏を名ふ宗道外を号する然れ生誕
書を抄く肉を用ひん京蓮華日院の南の庵に
て化世壽八十の宝曆十三年癸未七月十日

は村築基の徳前云々の故なりて居城の浮草を宅
り新在宗と云御よ任字子既在に和歌連歌を好む
持は字書の伎よん有二字子宗具專高又倚松庵と
号せらるるに庭は古松十餘株有るなり宗具字術
と志し一筆で書を以て始加友清と名付はは後より
表も作候はは子雨世より宗よ任り壽百歳を任り
久しに 後中尾上皇仙洞は古て修書の法を
勅問有て鳩杖銀指茶酒の湯有る三年九月彼
庭中の古松の本は松草数茎を生ひ奇異の草

寛文四年百歳に充る元日号

百年も控胞すすけり末を思ふ人を物念ひする

皇子宗祇宮友石全電又剛高号那波及園の

のこ

聖名冠なき時口下河辺彦ら具平と云ふありし勢

宇田の彦又口下河氏母の氏を秘す素才書家や

掾の程波の傍に隠居せしむ身享三年丙寅五月

三日致年六十三遠信を晩年集と云ふ中の所

下聖やありし聖と云ふの條を取て東をのり名を頼

僧契沖禪の字人俗姓下川寛永十七年庚辰掾が

尼流に壽る年五歳夏夏記記はる七歳癩を病

て三陽宮の靈夢又病を降く名傍を成一とあり

初してと里妙法も手定密師の才も成十三歳

秘を難く聖山に於けり時の為と稱せらる寛文二年

掾津國生玉曼荼羅院に任一後遁去て大和の

法もよきわくと密法戒けす泉あり井里又池田

の例とし信り同い年本師手定密せらるより遠希

よておほきも信母氏致るよとて院を遠き程波の東

言津彦をト圓珠庵と云元祿十四年^{乙酉}三月廿五
定印跡踏して逝し年六十二庵後と察
つら井仙周及牛と号京師へ仙周の梅口主水
同海山秀冲 岑柏と号信濃の人
同聖田志肅 抄津と号のり
石田善濃 将実と号氏との通稱高宮治^南西宿の
初友し
善勝の姪在儀通名と号進 正字山風小字東秀
二子女才民子し

真流の姓加茂縣之國郡博士と云京始の三枝と
云り遠可廣栢のり善勝の字ぶト号と被
中西赤山の十百と号と号能徳と号有信義の南と
宮村と幽栖し
石田ん良の伊豫ち河侯の士し醫を學て京師と遊ぶ
終る年六十一
釋と庵京栢の伊紫のり京師と有り正角のりし
京栢のり京元伊房
僧備蓮の伊勢のり善田流の僧は戸の院京地し

惟為坊の平陽由國のくくして芭蕉も屬て俳諧の名
有と集むと栢集と云

兼河と民禱の亮字の簡亮^{カニスケ}申通名といふ所^カ一
の身^カに五名不永業字の承父に在るのの蒙内誌の他
志して民の故南多羽標とあるの^カ平九年^カと
歿

僧文孝母の内及尾張ち山の長し粟津の終る五上庵
を結ひて仙幻庵と号し土人國の事と云芭蕉の^カ人
痛持名を著元禄十七年二月廿四日と庵に^カ

安後羊山禪の為事福名居通稱新女初^カ年
至見内通居庵と標よ小庵とはよ

甲斐徳本の永田氏著書梅花を名を彦刻と^カ所^カ
高の^カ水村氏肥後の^カ

龜田窮^カ由^カ曳尾と^カ結^カひ

山村通庵名^カ不^カ生^カる^カ伊勢國松坂の^カ法橋と^カ叙

同^カ名^カ角^カ村^カ氏^カの^カ永^カ師^カ 死^カ靈^カ又^カ悔^カも^カと^カん^カて^カ病^カ文^カ教
年^カ純^カ系^カ貞^カ福^カ寺^カ洞^カ泉^カ禪^カ師^カ彼^カ國^カ下^カ向^カの^カ時^カ勢^カ力
よ^カて^カ靈^カ冥^カ状^カを^カ送^カて^カ去^カ追^カの^カり^カ康^カを^カこ^カと^カ才^カ子^カ高^カ隆

慶せんしとの異月の田舎るて上水を取捨新
成形水米は糠砥黄し初の手入へー 諸病の
障りちや

○松平初事ら因々の外科を業とし室井よ友の
係を因りて事よお對ゆる思をぬゆるなり 勲をもち信
二生疑三束よあふも一旦ゆるゆる行て此の如しと決れ
水にぶ此れを請て下を乞指揮の所を穿てりゆは法原
涌かへ老後能得よ又あり人參のあふるのを考へて
なよ申て柳む鶴屋庄招に此の初もらん^三と^望擧

一 蒙節(なり)を津傍せし哉又たよ秘の

弱いよる 庄老中よ 唐くれきん

強いよる 水戸傳人よ 老ての乞食

後よ立あひよる 田安の後見よ 中川の庄妻

益しあひよる 庄為らの重請よ 伝宅の造作

中をぢらあひよる 毒心の組小言は 妻頼みの氣指

お坊のちぬえよ 水戸飛屋よ 市川中園次

強よて弱いよる 庄用お後よ アメリカごころ

まらあひよる 奥浩よ 吉原の囲女

早いとら 外国の方お世よ切ら世のお事
て下へきんて着る謙き所連平よの徒のこま
此節のまゝい物馬服格のよじよ日産とら
控らあひとら 秀ありよ 一頁の料理
尻あても揃らあひもの 出の且およ落た世の新造
兼もめしりまゝあひとら 庄屋の者も格よ
お家の庄屋とら
異いあり 芝の洞練よ波島の灸
後よきまどりまゝあひもの 雷降の想りよ

足舟の毒

けんれき

庄屋の赤標よ 庄屋格

国者儀を世

あふあひ物

官標の庄屋よ 外国へのとら

列一まどり一あひとら

お神下の巻後よ

此節のこころ

よ風の吹とら

神田橋の河内よ 津村屋祝

ちよ古書芳れとら

西九下のりまゝ 其の自分書

有とらまどり

海防博の了字よ おいんの筆は舟の岸

あふあひとら 有とらまどり 庄屋の格儀を世

一 肥後 當君英雄 藩士又稱慷慨の士 依て奢る
 一 薩摩 上下一同より 但多きものぞ計る
 一 中倉 世評とやら 乱を合む
 一 筑前 文をたよ 世活も来る 中よ又稱
 一 阿蘇 奸臣三入 あんた 上りも
 一 伊弉松山 君臣皆 朴
 一 高松 藩 藩情 藉
 一 水戸 文有て 武なきものぞ 武有て 文なき

一 仙臺 君侯英上 藩士
 一 肥前 唯一国の利を 務む
 一 名爲女 情 朴も 武なきの盛に
 一 指路 文を 世よ
 一 因阿 君侯 ちきよも 亦 中も
 一 備前 因阿の真似を 見る 許り 政る 直に
 一 福山 世評よ 文国と云
 一 廣島 怠惰

一 長所 亦所あり但和洋砲の備有

一 雲所 國藩文をあるは或もせし茶のをも愛し

一 會津 又武盛に

一 赤沢 君侯上手去藩士慷慨

一 佐竹 慷慨

一 庄内 一藩水戸を伝向し

一 栢代 武盛人の

一 赤浦 水戸伝傳

一 川城 君侯の間ちのし路ありし

一 津輕 ~~可もさく~~ 君侯

一 加賀 可もさく不可もさく

一 越前 武備全備

一 尾所 當君の去り去藩中情弱退身あり

一 藤巻 君侯相言藩の利をとりし

一 紀伊 藩威を振ふ事用金を取返を努む

一 彦根 國藩文武たよあり 藩の申出を

しるし利を好む

一 辛酉九月^{十日} 派去藩の意尊お臣考政命せしる

○ 終見條脫ハ獄苦區々何量
一 入能稍億却煩藐々如是

一 辛酉九月十七日唐周方和寺殿作後

方月有也

和宮標市下向市教樂市日信

十月廿日

方月通下

作也此院向之てて通下

方月

一 秋里離島の河内國名所國會

栲尾山觀心寺錦部郡觀心寺村有真言宗開
山實有上人謚名道興法師俗姓乃佐伯氏謬有入
實海子德い為部密法を稟して長四年觀心寺を建
營ハ栲尾傍者とし号ハ和十四年丁卯十月十三日
化寂八年乙午三月八日金堂上りの方有

一 楠弓首塚宮爲殿の東有延元二年五月廿日抄分
濠川に於て自双

一 ○ 後醍醐天皇

仁皇中代房諱言治 後宇多院才二皇
正應元年十月二十日誕生嘉元二年十月廿日降服
同日敕三位德治三年六月十九日立太子文保三年
二月廿五日踐祚長祿三年三月十九日降中位
延元三年八月十六日崩吉野宮年壽七十

善良親王

一品中務口母攝統三位為子

美宮

一品号奥河原又字津華

宗良親王

征夷將軍口勢口母同上号妙法院口師言院遷俗

身良親王

遠方言王聖用房言為攝

護良親王

征夷右將軍兵部口初梨奉口師還俗号与塔院
言言母氏部口三位局師親女

隆良親王

征夷右軍母時后親房女於吉野上珠

世良親王 早世

右宰相^師上野守母年古更俊女

女

恒良親王

东宮前坊母河野中守康女村行俊行院

成良親王

上野守母征夷守軍

俊村上院

南朝三代内侍兼良一品兵部右母新待院

河野中守康女三年十二月十五日

河野橋尾山親人吉隆山麓陵

忠言法親王

聖護院母年古更俊女初号淨言

德良親王

征西守軍中務少元正五年戊辰三月十八日薨去

葬于肥後八代郡藤山

古覚古宮

小園死所為名成上孫

無文和尙

遠可與山^考與吉用山入唐之人

長慶院

南朝三代市諱寬成文律二年癸丑三月市遷位
同四月八日市遷位諱名金剛人

後龜山院南朝代

市諱顯成母高吉の院勝子近出たち臣經宗女
元律九年壬申市諱明德三年和年十月五日
市遷位子ち上つ皇言身^皇應永世二年甲辰四

月十二日崩市葬城所葛野郡小坂城福田寺後

言福院

長祿元年十二月二日為赤松と雲孫初吉

聖那川上在神^聖谷金剛寺

恭成親王

式部卿と宰相後征西將軍

一石川郡金剛山寺早城址とた言^皇以補^皇及以城^皇中^皇て病
死年年辛一南おつ授^皇年庚申正月七日^皇し^皇光^皇さ
秀芳^皇及瑞^皇ち^皇后^皇士^皇塔^皇ら^皇本^皇九^皇の^皇跡^皇の^皇醫^皇士^皇五^皇備^皇有^皇

一 磐城郡弘川古弘川邑に有る宗西の塚有園位
上人墓と刻 同古に仙臺法師の墓も有

一 平石村神が山言考るに後醍醐天皇の皇子に弘法師
三十二年の時此山に安住しむる比弘法師と言考の
寺も宜まひて詩を賦むる

園林猶坐茶堂曉三寶之寺 一島有考
く有る寺に雲水俱了く

一 仁皇十六代の帝 应神天皇の陵古市郡に在譽田八
幡宮の所社に中央之神と云皇代仲哀天皇任吉古神

右神 切皇后 仁皇

应神天皇在位四十一年 聖壽百十歳 同庚子甲午年の春
二月十有九日此帝の崩り

仲哀天皇の崩り四年二月に 聖壽五十二歳と云
崩此帝の后の神 切皇后

应神天皇の崩り十二月四日辛卯の日に 降天照すに 皇孫
神 切皇后の崩り 三十一歳と云 崩り 治世五十九年
聖壽二百と云

应神天皇の崩り 七十一と云 帝位に 倚り 治世あり 地人

一 同所又台伊豆の重信の墓も有同。此所又我死の
亦村を女に付れし年二十ら

一 河内郡標嶺峠より三丁許り少くは切山迄先有古
主宗徳の墓も亦多し。自他にりて下れ可葛那
那原村の墓に母の墓も相結空より降てり又と
勝乃の舒の天皇の年二月卯に誕七歳して葛
の院に満ちるより日く十方通少より願の教習して修談
乃も其信の年三十二歳の時に宗を皇て葛原山に入
安居のより三十四年其墓を造りて松子を宮に元

神呪を誦し白雲の塔仙房の隠し鬼神を侍
日域の靈嶽を修歴せざる所あり。其面の影す
てり其塔をす。福し合馬嶽より一馬道の神を供へ
神異の奇蹟あり。

一 信長が甲斐南の属村新倉村の東に楠山に信
の墓有。三年四年正月五日此に我死の塚上は楠の
古樹を柱て有の事。 上抄出

一 天正元年辛酉十月廿二日安藤守元と敵所返

大目付

此後向ふては違ふ

一 高麗葉成若東老成るの記述を保い年下商新刊
同九年教に

一 上野の志願寺の寛永二十年十月二日入寂

○ 阿彌陀系の神の基の元の元の

五妻下谷房中跡 王台常樂院 田畑廿五丁

田畠田畠 真喜樂寺 西京八廿丁

三番西京三量寺 真喜 豊島八廿五丁

一妻上野島村祥元亦西福寺 沼田十五丁舟屋有

二妻中沼田寺云延命院 亀戸八二里半

三妻亀戸祥常光寺

寛城邑性海寺の延命院の縁の基の阿彌陀の
末亦たの造りかまふと世俗本跡の延命寺云沼田
延命寺云三丁手付下へ通る土手下有らば延命院
跡の縁の基の常光寺も有る

○ 山の寺の阿彌陀系

一妻岩谷寺の阿彌陀系 有人傍老作

二妻同通橋下西倉寺 聖徳太子元化

三麦青山熊野様下言律寺 同字法住

四番国百下言光寺 中野姫作

五麦国通下保下梅宮院 聖徳太子法住

六麦赤坂下木沙泉寺 以基寺作

○西乃阿彌院

一番西乃保大春寺 運慶作

二番飯倉主下言長寺

三番三田下自春林寺 喜日作

四番高輪唐申堂横下正覚寺 安阿彌作

五番白銀正徳寺

六番目黒祐寺 直人僧考作

一聖阿白雪山妙法性坊尊意僧云二月廿四日
會り

一白魚式書云は是の白魚の尾を名古屋浦の
白魚も所雨多有りて好せり云々云々生ひ云
又同書云云是の末の方白魚の子を拾ひて
多く取生候と乾て納め置考云々云々の拾ひ
後端へ垣を結末ありて垣切て云々云々云々の拾ひ

極成波^り取んぬ故^りとて白魚の^りなりん^るを^り成
得^りて^り自^らく^りと^り成^りて^り不^り不^りの^り成^り
形^りと^り白^り魚^りの^り形^りを^り成^りて^り其^り用^りを^り解^り
元^りより^り所^りより^りと^り成^りて^り他^り所^りへ^り伝^りへ^りて
と^りあり^りと^り生^りる^りは^り素^りの^り白^り魚^りの^り此^り法^りより^り生^り
始^りと^り云^りり^り世^り説^り慈^り唐^りと^り似^りん^る也^り乃^り當^りり^りし^り候
家^りの^り記^り云^りこ

一 右等りの記抄草

一 辛酉十月十五日

當今市味

和宮橋市中向清水坂へ市入集あり

一 辛酉十二月七日 當時前産不致よりち東西の

外は屋敷内は焼失屋敷和へ延焼田所等

め追焼る也下程中四ノ降巻の口焼跡る

一 同日十日辰刻

和宮橋清水坂より市本丸へ市入集のとき

作也

一 同日十三日

して中板修好の法師我亦多事ありて
紫の尾を結て涼切な儀表中一人と前殊臨中
あめさるる愛も於て金光上人の念仏弘通福及利
益の爲ぬる儀が伏座も考まじら場の思ひよて忠告
云々を憑も〜〜逆上りまふ定より忠告種々乃
宮物も訪り金光房の住居も訪りその懇懇しき志
後世の爲言世の縁ら考ねし思ひ此傍りしるや
牛と成りぬる畜生と成り行る人の悪を教ふ金光
上人の牛と成り〜〜の忠告も遇つて牛の姿と愛せり

ちあち悲の方後よや現牙悉牛は似れた面お許りの
元のくみてまき苦〜〜切しなるよたあんしよまき里も真
似牛村と呼えり善住村と云〜金光上人是を強く堅
まひ誦經を仏して苦厄も考らん〜めん逆行致有ん
は自業惡念の感較ゆる如速くは福及よ計の難意
考よ上りち師自ら確興へ由り勿存て移る難化の悪
んをい海なる〜ま下預ふち師曰く我東奥よ
わらる考の念仏弘通事達して止るん逆高自身
の儀も由化有て金光上人と接て曰く此係れ我い

異くはぬ毎い奥より持より蒙事の忠告の満蒙
及び一切荒生を教化し宗仏弘通あるを力んと
懇ろに教示し玉ふ者光上人教養の涙は古列の袖を
絞り流すは陸奥へかり彼蒙事の忠告を對し帝の
言像を拜せしめ改悔宗仏教化し玉ふを教養を
授けしめて角も落毛尾も落て毎い元のく方々
様々なる書子親睦し仰き地を伏て進奉し
の涙をむせひ彼忠告の事と雖も切お事し玉ふ修
宗仏のりると成終よち往生の事像を遂行る忠告

お事のとら二年と云南邦領遠西の坂下吾師より
二年塚あり信と帝の言像に彼忠告の返る御
の栗原郡よ女垂し玉ふ如くは東奥五郡の如き
ち頃の或る言は國光と師と云は告有て曰く
我像をお事し稱して一字を著刻し結縁利
益せしめし玉ふ是は危て仙臺はあ事那の
内よ加藤建三有て永壽山往まると號

○國光と師りる他國之末の南條相岡の唐に傳流あり
はる漆の時國母の秦氏を姓に源氏としてにゆき皇の

市後西三條大居士光公の後流しぬ等しく昔人
十五の巻始めては割らぬ等しく判授受戒しぬは修
飾り日よ新しき一て智意第一の巻に御書
の唐字の字を世に重なり此の巻は後白河院言院
後白河院三帝の戒師と成せしむる巻にて世の
帝の御教成りし勅師と云ふ事ありし巻に
後白河の院の惠光善光院後白河院の惠光院
善光院の通の国師後花園院の通
上人の極及も後白河院の光也大士東山院の国光師
中流の院東漸帝御園院の成成師光格も皇の
弘慶寺師行在世滅法の勅号十なり及ふ此の師
世にお現して念仏を弘めまひし事ありて吾西要
の講ましく助さむしと思いて念仏すれは皆悉くよ
往生する事ありしを念仏の成るるしあり吾西要
心を勵し一勸むし一善念仏は無く往生を好む
日課念仏お終して往生を好むし一見よ留るる
事ありし一念仏の修行進を難くある事あり

一 兼後寺雜録五卷浪華院成院晴海兼後寺の

送家のおのりより後述にて安政三年丙辰上本は
あとし危し掛年

一 藤原重隆高と号するれ恭宣の世肅又隆高也号は
小室のち吉中姓の本村家なるは坪井なる習生初め
浪義揚りな居行へ海邊を業とし所存中より井を
穿し小園蘆おもしろし是れち浪義の蘆也
蘆原事と号し中江船場長服下は務任と書画と号し
他家多通成り世の如し

一 ち國書下指野原の画と名有

一 和歌郡山侯の六女は柳沼權忠女始名中野名小里恭宣
ち天満園と号

一 海辺神代志名女は下越守宮清隆續は号法入
沈南蘋のつし

一 池野秋平名は戴成守り大産ち雅きと号し平安の
一 賣希存の西恩肥前國蓮池の姓は紫山名は元昭号は
月海早年より雅接して秘を修へ後より道に
業を営て肌を助く自ら氏を改めて言ひの
遊介と号宝曆十三年癸未七月十日歿年ハ十九

一 宝曆三年丙子、ち雅重三十四、高亮三十九歳
 一 安永六年、ち孟魁字、孺皮甲、高亮の、三十四年
 甲辰四月廿四日、東武、十、致、の、年、六十三
 一 ち雅又、名を、高亮、字を、高成、と、号、す、伊、予、九、十、歳、と、書、す
 二、の、享、保、八、年、癸、卯、五、月、八、日、生、る、父、池、田、高、亮、門、
 名、宗、を、慕、う、と、安、永、五、年、丙、申、四、月、十、三、日、病、を、得、
 葛、原、の、村、幸、二、年、享、保、辛、酉、四、船、岡、浄、光、と、孫、
 一 生、傳、坊、建、之、年、は、始、禧、平、宗、如、一、健、業、
 覺、一、健、業、
 通、一

城一健業

城元 信長東に坂、謂、此、流、
糸、八、坂、方

城意

城存

靈一

弟一

清一

盲、人、の、五、流、有、一、方、三、流、志、在、一、島、
 城、方、二、流、大、山、妙、文、
 一 ち將國、赤、河、の、水、千、里、許、り、又、中、國、と、言、所、有、是、より、三、里、の、
 小、抄、戸、と、言、村、有、赤、敷、七、軒、又、三、里、絶、壁、を、踏、て、三、面、と、言、
 所、有、三、往、返、漢、を、流、り、舟、を、踏、踏、絶、て、有、り、と、唯、岸、

の畔を千疋百疋して之を攀見を給うる凡重許り
を授て大河有向は戸数廿軒許りまもつる有見見り
三面に獨木舟二艘を以て爰は往來は此里より小池
ち炊助と云隠士ありて池のう納を三平二代の孫と云所
持ゆる雜記に云此の數は數百年の物語として此の製
あつる京此所は氏宗平軒も有つた落年より過て
この如く僅成亦數と成ぬを此地に下四方許りして
置悉き何の純壁をも候としてを等舟は等々如
地は故後村上侯の臣内シ候より毎年取極あるを湯

又米澤侯より七年米二十俵を賜る米は万石中
漸く往來村上より純壁として更なる

一 元は藤本中説の眞の位淨瑠璃の作意は此の位に
方舟枝相方の新くする位に

一 惣領尚信慶安二年三十四歳まで歿

一 佐々木太史尉信盛播磨益井の山奥五石^{うにき}の岩

一 平生五石の盛を倉として更なる所倉を百十餘歳
して仕建しを孫久^たつと云あると云

一 お獲岩風橋を助に和子の心掛を有と書し物記

元寛政七年乙卯二月廿九日歿年四十九歳名釋姓右
雪了因 坐抄也

一 蕭信重 世に石居

母吉太夫

一 永福二年癸亥八月四日の曉従四位下ち昭憲の毛利
隆元年吉年甲辰一藝子吉田のち通子と稱法禪
宗弟も秀深宗ち宗士

一 元龜二年辛未六月十四日 従四位上

毛利元就

一 相長年吉年七十五従三位下ちつる

一 徳田伊豫守元清の元就の男

一 吉川元美の元就の二男元美の嫡男元長と云ふ
元近元元氏と云ふ氏部も浦 恒信

一 安藝國の伯吉川政河も種基の身長七尺許り
力重なる超世の鬼吉川と号せられ人の妻
智茂の松の下の子の女に嫁服は女子三人有妹は
常司の政河と成師の教前の妻比のち常司の妻と
成男女の子数多産てこの昭智日向守光秀も臣
亦及内務の妻と成此版よお生の女子福徳恒信
心成の妻と成て後一恒信妻も局と号れ女は也

丹後守正勝の母

一 慶長四年己亥^{音ナカ}長宗我部元親年五十四歳孫三郎
 信親三十四年考没戸次川にて島津と戦死
 其の女子元親の孫才長宗我部盛祝の妻正勝の
 母川五郎次郎澄は香川の妻を成て病死
 其の母津野孫三郎慶長五年自殺其の女
 盛親宗智の此の後信義の役城守に入り後
 して擲捕れ五月十五日を没せしと傳せし
 右四の母の事及内務の事と傳し元親の妻と成

秀吉の后神子田村左史

尾張息女史

一 山内藤助幸盛の討れ一年三十九本姓の池田
 一 思ひある村禁禁の名調り咽を嫌し忘るる
 一 三正七年己卯九月二日の初夜木村津守村重左衛
 城を思ひお尼崎城に入り同八年八月七月二日兵庫
 より兵船より来て藝者より落し毛利輝元より持持
 せし備後国危道より南谷の織田信忠より勲
 又喜信より武子後妻の世を成しり持持
 京信吉より女地を賜ふて境の津より左利権

乃重と号す此ノ武ノ長ニシテ然レバ又
之ヲ能ク利休ト云フク子新五郎ト稱田助
ト云奈後ニ祝賀シテ宗三ト号スニ守孫四郎ト
号スルヨリト云ハレ

一 毛利元就の男後四郎秀包（元就の長子）は政宗と云はれて
筑後之守女六万石を賜て侍従に任せらる。

一 丁酉年壬午五月朔日の東夷より智光秀より寄
て聖澤右衛門 為又伝長と號す之實れ玉とて
極大の中へ飛入玉ひしと云河金と云 續て

飛入引お 市首を討て野に後より秀次と云
左近より仕立て毒腫と苦し自裁し平河に加藤
清正と号す 長生と云

一 思ひおる打禁禁の夕烟う咽も嬉し
右何の集り入 船や博常のり

一 丁酉九年辛巳二月十四日宇奈多和泉より直宗年
年五十三男、中秀宗五十年十歳

車宗の才七中兵衛左京

一 丹波の宇津川村の内宿村より十兵衛光秀と云

地有後嗣るを以て賜ひし光秀密を管ふ代物
之れを以て妻自らの嫁の圓りも殊に中を以て變
成て賣て以て價を以て貯蓄を調へし後の貯蓄の
才成に於細川兵部大輔重孝に於て傳ふに
るを有杉重よとて以て之を去て織田公に於て
初めは重徳を以てしして年々々々官途進んで
食知加増しは其佐和山系は志保郡を以て遠
丹波一國全く賜ひしなり彼妻の持も其傳を以て
し程無病と稱ひしなり其の後切しし恩を

報せし進葉送の儀を以てりやるとも其れも
柞光秀の土波の庶所とて土波の中杉基十三代は
當りり父を杉元祖父を兵部大輔頼興と稱ひ
て五年丁丑丹波一國三十五万石を賜ひ舊領の
近江佐和山系は志保郡の十八万石を以て辛酉石
の石を以て成り近江志保郡坂本坂本村に於て
石

一 周防岩國吉川家の長壽川此亦軒平に在り
平一徳徳を平記の十巻古老物師の由緒也

集て録せしむるに秀川は継と云ふ短の男也
徳ある系ははし^清梅月も竟真宣阿補遺せし
宣阿の近世名をなせし桂園將肥前も秀川
系樹ちりの四世の前此系の元祖と云ふ説教種有
依て成政の自裁して二十二年

一 愛宕山と白雪山と云ふ

一 加友清心と云ふの羽柴福吉ゆかりし時よりは
屋敷の勅勞云祥りも式時族を刺して併して
豊公のるより従ひる百三千里を馳りしなり處

千里と云ふる傍に建志と助と云ふ所なり

一 眠義と云ふ山雨過 覺来殿園生徳源

一 上野國なる田を白雪山の麓に菅原と云ふ所あり
昔も愛も化生と云ふと云ふ説有

一 百滿國の人其國の王字とて兄才と云ふ後女の終よ
逢て日本より来り備前より治せり云々兒の字
を以て教と云ふ國で此地を見島と稱しは古より
姓も三宅と改むと云ふ備前の字存ありは古より
字存ありと号し云々孫字存多和泉も能家と

子與弟二子由家二子若家三子喜長この
子与を中基家直家の子りハ中秀家

一 藝々の武田の庶孫武田左膳右衛門左衛門是利家
より多様國を賜る外多様國の武田の始祖
此人武田の巻んの成り和歌しし名有ま
能書し年齢百三二近長生せしる

一 又十年十月十三日尼子伊藤を逐ふ年去年
八十四

一 禮記又飲食男女人之大慾存

一 隱徳大平記五巻小山國平家物語信徳の
前司好長作又隆盛時長の作の平禱あり
横河津内宮の子孫教法下山聖下神の重現
信て述作の本に世よりするを介いこの作有
中修多性仙接授能神權現の神勅よて長短
言中迅速緩急の常情士を附 **如性城**
子弁子一 城邊也一子弁子一 昭石角口時の
名くして禁中より雲井内本を下一賜る是
名にの世より傳ふるまゝの平家

一 毛利家系畧

平城天皇弟二之皇子阿保親王之後 大江山

本主 音入 千古 維時 重光

匡衡 奉周 成衡 匡房 維續

維光

廣元

因幡守 大膳忠人 在河毛利庄 恒有子

毛利之稱 以入名 一光 阿号 嘉祿元年

乙酉二月十日 卒 去年 八十三

親廣

民部少輔 入道 蓮阿

時廣

正五位中 左衛尉

重光

從五位中 右近衛 監利 播磨河

經光

城守 佐藤 千五郎 日

時親

修理亮藤坂了祥建武三年乙亥二月是利
多氏より藝者吉田の庄山田村三回要河内國
加賀國の庄千尋を賜り依指の庄南條と合へ
二千二百畝の倉地此時始て吉田より始

貞親

從五位中左近將監法名詔宗

親衡

初名親茂備中守法名室宗

師祝

備中守從五位中後段元壽吉田の庄千尋を

合々領り

匡時

坂宮内少輔

重衡

有田城守

廣房

中督大補

元房

隆元少納

實廣

麻呂島部女補

忠廣

伊島尾言助

廣世

福系尾近守監

元剛

少前部女補

光房

備中守

熙元

治部女補

豊元

治部女補

弘元

治部女補

貞元

備中守

永正七年 八月十五日

幸松丸 永三年 七月十五日
女子 山岸川入と申事書

元就 老後号曰教 秘四位上 山徳乃十三あるのみ

陸奥守 大守

明應三年 誕生を名松壽丸母ら秘系内を
の息女 大永七年 丁亥上洛の時 秘系より
錦の車馬を賜りち方宗よりお伴の儀かゝる
元龜二年 辛卯三月十四日 去年七十五従
下 猶るる 實乃吉川治部 備國 陸女

蒲桐の教勅許

元綱 少輔 三郎

就勝 少輔 三郎 上 後 少

元範 少輔 三郎 上 後 少

隆元

永祿二年 癸亥 月四日の曉 年去 年 早 藝 系 吉 岡 の ち 通 ち 少 輔 隆 元
体中より大膳方よりお伴の儀かゝる 秘四位下 常侍 三郎 隆元

女子 完戸女 藝系隆元の妻

元喜

吉川 駿河守 秘四位下 辛酉年 十月十五日 年
辛酉 室乃 熊谷 治 重 の 女

隆系

中 卓 川 左 兵 衛 隆 元 参 議 秘 三 位 中 納 言 隆 元

山早川左衛門平の女

女子 傳中國上京右馬守元祐の妻

元秋

杉本中補十郎

元清

穂田治部痛伊豫守從四位侍從

元知

お母孫四郎早世

元康

毛利右衛門守從五位

元政

三野左衛門守從五位

秀色

後四郎從四位侍從筑後國守留女也

輝元

右衛門安藝守參議從三位中納言清化子也

らん屋形号光許

女子

石見國三本杉城守吉見三河守廣朝室

秀就

右平長門守從四位少将

女子

吉川氏庶

室

就隆

日向守從五位

綱廣

右膳右少從四位侍從母裁前中納言秀康卿女

右德院殿侍書女一下市城一下市入集

女子

成後中納言長室

女子

唐司關白房輔政所

吉就

長門守從四位侍從

女子

右平攝津守一下市室

女子

内膳前一下市式信室

女子

吉川内膳一下市廣橋室

女子

毛利禊一下市匡房室

女子

右平中納言一下市雅室

吉廣

元重
大膳方丈徒四位侍徒実の綱廣男

監物

吉元

長門守徒四位侍徒実の綱元廣の男

元陳

左門早世

宗元

依渡方徒四位下初名元躬早世

女子

若平方隅守継豊量

女子

毛利主小正師就室

宗廣

大膳方丈徒四位 侍徒 実師就男

重就

式部大輔徒四位 女侍 実同性師就男

重廣

民部大輔徒四位中 実有子日向孝純舍弟

女子

若平肥後守容綏室実高方膳方丈宗廣女

女子

唐司右方屋補正公藤原

女子

有言上総又頼男室

治親

右膳右史從四位侍從

匡芳

定次中甲斐守同氏能於中匡隆善子

女子

杉平左佐守忠經室

女子

杉平中納言右隆室

女子

近出右内子師久公兼

女子

毛利源政守匡邦室

女子

杉平右衛門利通室

某

定次中

高元

高懸善子

女子

有言上総又頼男室

奇房

右膳右史從四位侍從

高然

右膳右史

右譽

用坊者水陸寺法者右詔書子

齋點

右膳右史從四位女右實舍才

高元

右膳右史從四位上少右實定次中男

高房

右膳右史從四位女右實妻右方才室才

右軍 宗高右才三右君和子

慶親

女子

伊達右膳右史宗徳室

女子

毛利右膳右史元純室

慶親

右膳右史從四位上女右實舍才

妻女

松平康次中右實紀室

定廣

右膳右史從四位侍從實同姓治部右史元善才

妻女

妻右史定廣室

一 香河家系畧

桓武天皇才五の皇子武烈は葛系親王の御子

言視王

言持王 平姓を賜

村岡良文

イ

從五位下因幡守

右通

小五郎

平浦為光

平治元年三浦の祖ちぬまの孫祖父

鎌倉右通

權右左

常村

四郎左衛門 長尾 大庭 榎島 豊田 勝野の祖

権左系文

右五郎

系文

權五郎法名は満鎌倉右衛門

系文

小五郎

長江天皇

四

帝秀

權

言

助

帝政

權と支此数代補憲子臣

經

中 香川の祖

經

三

帝相

帝光

安帝

清帝

以帝

帝

系伝

言氏公の子任

師系

方系

吉系

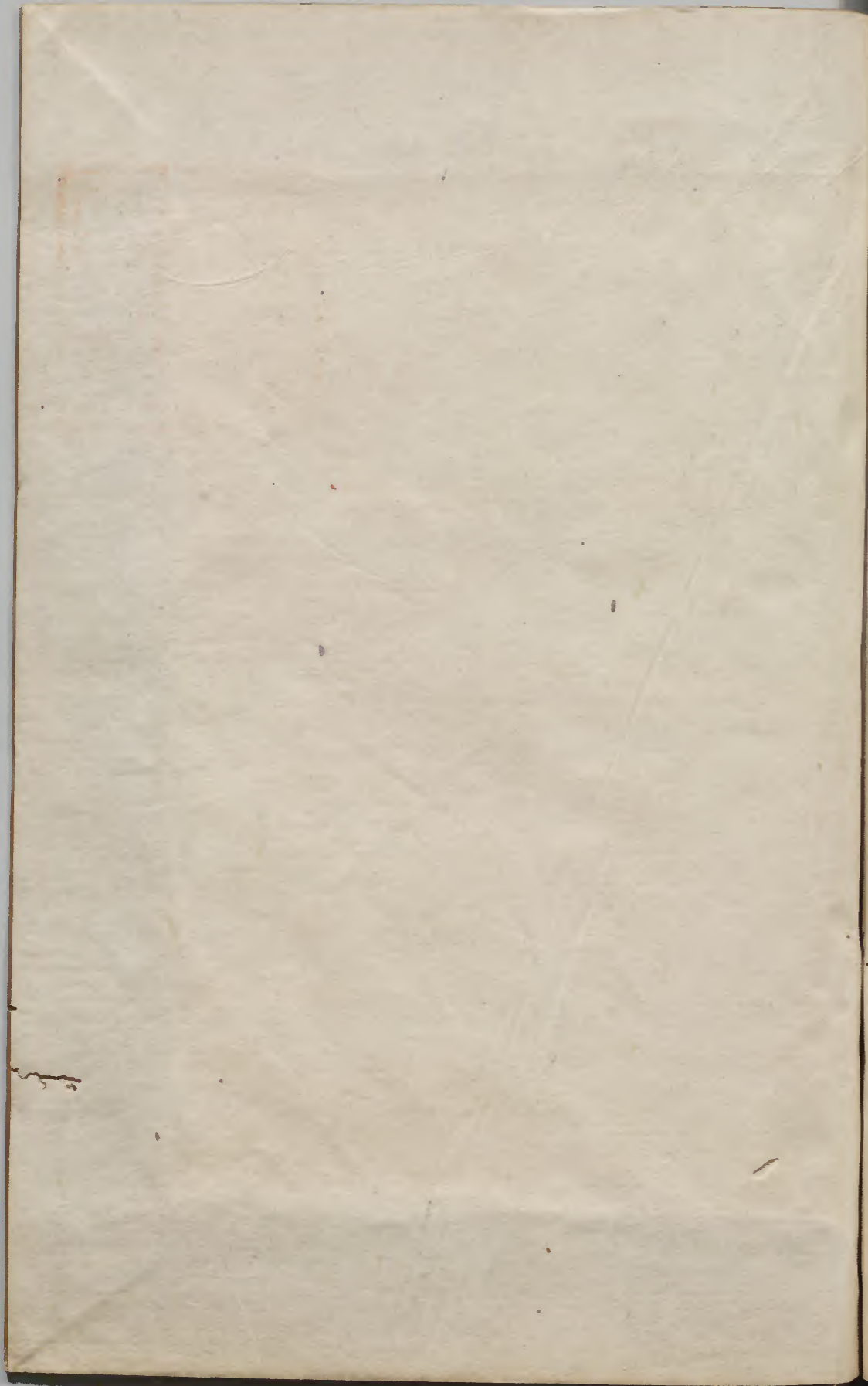
その他書

以系

元系

式部女補

主降香川又左馬主系継此ノ後ノ兵部女補ノ記
同左馬尉房系等ノ名アリ



Vertical handwritten text in cursive script, likely a signature or a note, running down the right side of the left page.



